

ファイヨル侯爵

—ネルヴァルによる歴史小説の試み—

白井 恵一

序論

『マルキ・ド・ファイヨル』はネルヴァルの残した唯一の「歴史小説であるが、新聞連載途中で未完のまま放棄され、作者の生前一卷にまとめられることはなかった。（劇作品としては『レオ・ビュルカール』があるが、これはアレクサンドル・デュマとの協作である。）ネルヴァルが「ふくろう党事件」のような政治的事件を題材に一遍の小説を書いた（書こうとした）ことにはいささか意外な感を抱くのも事実である。我々はネルヴァルが具体的な政治活動に身を投じたという確たる証拠はまったくもたないし（七月革命においても、二月革命あるいはナポレオン III 世のクーデターの際にも）、彼が自分の政治的信条をはっきり言葉にすることもまた稀だからである。とはいえ、そのことから、ネルヴァルが常に現実世界の葛藤を拒否し、象牙の塔に籠もって夢想と理想を糧に日々生きていたと結論するのは早計であろう。彼はジャーナリスティックな活動を通じて、自分が今生きている時代と世界の、政治的、社会的、文学的状况を関わりあうことをやめようとしていない。ジャーナリズムは彼にとって、時には不本意な仕事を強制する拘束でもあったであろうが、同時に、単に生活の糧を稼ぎ出すための手段にとどまらない、文学の新しい表現形態を生み出すための習練の場ともなっていたのであった。ポール・ベニシュウの言うように、ネルヴァルは「詩的人生と現実生活との間に極限的な距離を置いて」おり^①、また想像的世界の高揚は彼の失望への解答であった。逆説的でもあり、同時に非常に自然なことでもあるが想像世界と現実世界との距離が両者の融合を生み出し、精神は彼を追放した現実、自らの創作を侵入させることによって復讐する^②のものであるのだが、ネルヴァルはさらにその先の地点に到達することを目指してもいたのである。「想像世界と現実」の融合が狂気に近づく可能性

について彼は意識的だった。したがってその融合物をそのまま放り出すのではなく、再び現実の地平に置き直すことが重要だった。我々はこのような運動が彼の歴史小説をどのように進行させるか、あるいは袋小路に追い詰めてしまうかを明らかにしたいとおもう。先ず第一に様々な社会階層に属する登場人物たちのフランス大革命に対する態度の分析を通してネルヴァル自身の態度を検討する^③。たとえば「Le Peuple^④」や「En Avant marche !^⑤」といった詩によって彼が表明する民衆讃歌や革命礼讃と、Carrousel^⑥紙の記事に読み取れるアリストクラシーの擁護はどうして両立するのかといった問題である。次に歴史的事件の向こう側にネルヴァルが求めたものの検討を行い、こお二重性の本質を明らかにしたいと思う。

貴族階級

この小説に登場する貴族たちの革命に対する態度は一様であるにはほど遠い。ネルヴァルが自らの資料収集に基づいて言及している M. Le Provost de la Voltais^⑦のといった、革命政権を積極的に支持しようとする一群の貴族たちがいる。また中立の立場、あるいは無関心の態度を見せる者もある。例えばファイヨル伯爵は革命運動に係わるわけでもなく、また兄侯爵のように反革命戦争に身を投じるわけでもない。そもそも彼の立場は両義的であって、伯爵の称号をもちながらも家系の嫡流ではない彼は、貴族社会の中心に位置しているわけではない。一門の財産相続という点から見れば、彼は絶対王政からよりもブルジョワ政府から多くの利益を引き出せる。

懐疑主義と自由検討の精神は、後に革命を引き起こすことになるのだが、家族の次男三男に都合のよいものであった。彼らは、兄の財産を妬み、社会が変われば、もっと良い思いができるのではと考え始めたのだった^⑧。

実際、一連の事件の中での彼の興味は、専ら自分の財産を護り、増やすことに尽きている。例えば、兄のアメリカからの帰還に際して彼が心に抱くのは兄弟の再会の喜びよりも、歓迎舞踏会に蕩尽される費用であり、兄の娘が財産の

相続権を持つ正当な子であるのか否かという疑念である。

しかしあなたは向こうで結婚してはいないんじゃないかと思うが。
彼女の母親は死んだのだ、と侯爵ははっきり答えるのを避けた。
判りました、と伯爵は内心ほくそ笑みながら言った⁽⁹⁾。

「ふくろう党事件」勃発後彼はどちらかの陣営に属していると思われそうな一切の活動を避けて屋敷に引き籠もり⁽¹⁰⁾最終的にはその称号を放棄することになる。貴族の特権と権威を捨ててしまった彼はもはや一人のブルジョワにすぎない。ネルヴァルは皮肉にこう書いている。

彼の懐疑的、ヴォルテールの精神が、ブルジョワたちに彼を高く評価させることになった。貴族階級の偏見から自由な人物、というわけである⁽¹¹⁾。

こうして最初の二つのカテゴリーが自分自身の身分を捨ててしまった以上、反革命陣営に属する貴族たちにその真の肖像を求めなければならない。とはいえ、「ふくろう党」貴族内部の貴族たちにも色々なタイプがある。ラ・ルエリ侯爵のタイプ、ファイヨル侯爵のタイプ、そしてその他の反乱貴族たちの三つである。大抵の場合、上記二人の侯爵以外の貴族たちに対する作者の態度は冷淡である。彼らは王政それ自体よりも自分たちの特権の擁護の方に大きな関心があるように見える。例えばファイヨル邸の舞踏会の際交わされる会話の中で、彼らが話題にするのは、革命政府が彼らの財産にかけようとしている税金のことだけであり、国王の名はその特権を維持するための単なる方便にすぎないように思われる。

我々に対して、公共の支出に貢献せよなどと言うのは、(...)所有権の侵害だ。...
王座を危うくすることだ... 国王を支えているのは我々なのだから(...) ⁽¹²⁾

もっと後の方で、ファイヨル侯爵はこのような自己中心的な関心の持ちよう
を批判している⁽¹³⁾。

問題が個人的な利益と、階級がもたらす特権の擁護に還元されてしまえば、

そのような特権を持たない者が彼ら貴族の立場に同情するのは難しくなる。このように描かれる貴族階級が、読者の目にあまり輝いて見えないのも当然であろう。上に引用したファイヨル侯爵の疑問と、それに対するラ・ルエリ侯爵の返答は、この二人の性格と政治信条の相違を象徴的に提示している。ラ・ルエリ侯爵は「そこに心の高貴さと勇気と偉大なエネルギーをのみ見出す」⁽¹⁴⁾彼にとって重要なのは、危険に満ちた命懸けの状況の中で己の意思の力を、強さを証明することに他ならない。言い換えれば、他の階級を凌ぐ武勲を立てることが自己の属する階級の優越性を証明し、その種々の特権を正当化するものとなるのである。この種の勇気やエネルギーの礼讃は、小説に登場する貴族たちの精神にしばしば見出される。ところで、同様な論法による特権の擁護が、反対側の陣営にぞくする人物の口からも述べられているのに気がつく。ヴォルネイはカフェ・リュニオンに接結集した革命的学生たちの一人であるが、彼はそこで貴族の起源と権利に関する自分の理論を展開する。彼によれば、現在の貴族たちの祖先が示した「原始的な勇敢さ」は「悪徳と放埒に飲み込まれた諸文明に」あらたな活力を導入することになったのだ。以下に続く彼の言葉はラ・ルエリ侯爵の言葉と照応している。

王政に抵抗することができない者は王政に値する⁽¹⁵⁾。

犠牲者の立場に甘んじるのは馬鹿者と卑怯者だけだ⁽¹⁶⁾

この一致は少々皮肉である。なぜならそれは、この種の勇気を貴族が独占していた時代は既に過ぎ去ってしまっていることを示しているからである。ヴォルネイはさらに、この勇気という美德が自分のものであると主張する資格は貴族たちにはないのだと断言する。

彼らの役割は終わったのだ。運命が最も高貴なものたちに襲いかかり、残ったのは滓だけだ⁽¹⁷⁾。

実際、王宮広場で激突した二つの勢力の若者たちは、同じ位の勇気とエネルギーを示したのであって、そこには貴族と平民という階級の違いは一切関係が

なかったのである。さらにこの場面においては勇気の評価自体が問題になっている。街頭での鬭争は、どちらの側でも、個人的な勇敢さを競い合う場に変じており、自らの政治的理想を実現するための戦い、という当初の目的はほとんど忘れられてしまう。自由と平等の問題は、個人的な怨恨と復讐にとってかわられる。ネルヴァルがこの「奇妙な鬭争」を描く筆致は、現実の政治的、あるいは歴史平面におけるこの悲劇的、またある意味で喜劇的な場面の無意味さを表明しているようにも思われる。

まるで中世イタリアの都市にいるようだった。(…)とはいえ、結構な見物ではある！騎士たちの馬上試合の再現だ⁽¹⁸⁾。

どちらの陣営も、同様に作者の皮肉な視線の標的となっている。ネルヴァルが勇氣や情熱に価値をあたえるのは、それが歴史的、社会的現実⁽¹⁹⁾に根ざしている場合だけである。夢想された理念は夢想にすぎないのだ。この点に関しては、また後で触れることにしよう。こうした観点から見ると、ラ・ルエリ侯爵の価値評価も多少曖昧になってくる。成熟した精神と数々の経験に鍛えられた侯爵は王宮広場の若い貴族たちと一線を画していることはもちろんだが、彼の「山師」的側面を見逃すこともまた不可能であろう。

まず、彼の「侯爵身分の正当性は当時の貴族たちの間では論議的であった⁽¹⁹⁾」し、また彼の「城館はその歴史同様ごくモダンなものであり⁽²⁰⁾」、「城館と田舎屋敷、貴族とブルジョワの中間的形態であった⁽²¹⁾」ラ・ルエリの家系を由緒正しい貴族としてネルヴァルは提示していない。彼の貴族の称号が怪しいものであるなら、彼の行動がいかに英雄的であったとしても、彼を貴族階級の正統的な代表として取り扱うことは難しい。ネルヴァルが強調するのは、彼の貴族性というよりもむしろ個人的な性格である。ラ・ルエリ侯爵は、青年時代を決闘と恋の冒険で浪費した血気盛んな人物として描かれる。青年時代が過ぎ去っても、往年の客気は彼の内部でいまだ消え去ってはいない。たとえばファイヨル侯爵邸で、彼がタンテニャック氏に決闘を申し込むのを読者は目にする⁽²²⁾。彼は結果がどうなるかを熟慮する前に、直接的で即座の行動に訴えるタイプの人物である。何よりもまず行動の人間として、行動よりは熟慮反省の人であるファイヨル侯爵とは好対照をなしている。ラ・ルエリが、この小説の中

で最も魅力的な人物の一人として描かれていることは否定できないが、彼の魅力は彼が貴族であることとはほとんど関係がない、個人的なものである。というわけで、貴族階級の代表の名にもっとも、そしておそらく唯一値する人物はファイヨル侯爵ということになる。彼はブルターリュで最も由緒ある家系の出身であり、また自分たちの特権の維持に汲々としなない人間でもある。

正当かどうかは何だと言うのだ！重要なのは名前でも、財産でもない。心だ、性格だ、精神の問題だ。私が子孫に譲り、伝えたいと思うのはそれだ⁽²³⁾。

ただし、この一節は両義的である。利益への執着を貴族階級の墮落の兆候であるとして、そこから自由になることで当代の貴族の理想形態を実現する一方で、彼は社会階層の一つとしての貴族の重要性を否定しているのだ。従って、彼には反革命戦争に加担する積極的な理由を持っていない。彼の尊重する貴族とは、社会的な力を持っている必要はないのだから。だからこそ、戦場で自分の息子と相対した時、彼は簡単に武器を下ろすのである。

以上のことから、ネルヴァルの貴族階級に対する視点は両義的であるとはいえ、少なくとも、「ふくろう党」事件における反革命勢力の一つとしての其に関しては、一貫して否定的であると結論付けることが可能であろう。

第三身分

貴族たちの行動、態度の多様性と同様、第三身分に属する登場人物たちも、革命に対して常にこれを支持しているわけではもちろんない。王宮広場での闘争をもう一度思い出してみよう。作者はここで、学生たちをブルジョワの代表者として描く一方で、これを一般民衆と対置する。

民衆の、というよりもブルジョワの青年たちの、貴族の若者たちに対するこの奇妙な闘い(...) 二つの対立する階級が舞台に登った。民衆はといえば、二つに分かれていた。従僕たちは貴族側で、労働者は学生側で戦った⁽²⁴⁾。

ここでは第三身分に属する三つのグループが二つの陣営に分かれて互いに戦っている。革命の開始以降は農民たちが、当然姿を消した貴族の従僕にかわって登場する。また労働者たちの肖像も行動も作者は描こうとはしない。さらに、この場面では重要な役割を果たし、カフェ・ド・リュニオンで名前を挙げられた学生たちも、革命運動の中で実際の役割を割り当てられず、まるで忘れられたかのようなのである。ジャック・ボニーの指摘するように、「ネルヴァルにおいて注意を引かれるのは、革命側を代表する登場人物が、欠落していることなのである⁽²⁵⁾。」

ネルヴァルはこれ以降、どの階層が革命を支持し、貴族との戦いを行ったのか説明しようとしなない。大革命で主要な役割を果たしたはずのブルジョワたちはほとんど場面に登場しない。革命側の具体的な代表者の欠落の結果として、大革命自体は、この小説を特徴付ける二重性の刻印を逃れることになる。たとえば、具体的な人物としてブルジョワが登場すれば、小説の中でしばしば繰り返される個人的利益への執着にたいする批判的視線を、彼らが見れるとは考えにくい。このようにしてネルヴァルは大革命を否定的に描くことを避けているとも考えられる。革命勢力の側の対立、矛盾を書く代わりに彼が文中に導入するのは別の対立項、都市と農村の対立なのである。これは当然、ブルジョワ、民衆の対立の反映でもなるはずだが、その方向に叙述が発展することはない。

ブルターニュの農民たちは、一般に、都市の住民に対して憎しみと軽蔑の念を抱いていて、それを隠す気になることさえめつたに無かったのであった⁽²⁶⁾。

この怨恨が農民たちを反革命戦争に駆り立てる動機となる。

都市から来るあらゆるものに対して彼らが抱く不信と憎悪は、地方の役所によって告知され、宣伝される革命のあらゆる教義に対しても、警戒心を起こさせていた⁽²⁷⁾。

農村部に対して、

地方自治体当局はがあらゆる方面に発揮する勇気と活力は瞳目すべきもの

であった。村役場で、群役所で、あらゆる小都市で国民軍が組織され、クラブが開かれた。革命思想は四方八方に広がってゆき、宗教的狂信には、唯一フランスを救うことのできる愛国的熱狂が対抗した⁽²⁸⁾。

作者は常に革命陣営に対して好意的である。都市の住民と比較した農村部の住民たちの特徴を列記してみれば、それは明らかである。無知と学識、蒙昧と批判精神、野蛮と開化、そして最後に反革命と革命である。村に読み書きのできる人間は二人しかいない。行動の粗野さ、剥き出しの暴力性に関しても、酒場で実行された、ふくろう党员たちによるヌアイユの私刑ほどの残忍さは、革命政府側の行動には見出せない。さらに農民たちの徹底的な受動性も指摘しておかねばなるまい。彼らの蜂起は彼ら自身の意思によるものではなく、土地の貴族と僧侶による煽動の結果であり、農民は彼らに操られるマリオネットではない。一方、農民を煽動する者たちにとって彼ら自身の幸福などはものの数ではないのだ。ただしこの受動性もまた一義的に解釈することはできない。それは一方では、農民たちの自律的な意思の欠如、歴史の真の推進者たることを阻害し、歴史事件の場面で二次的な役割をしか演じることを可能にしない意思の欠如の表現であるが、他方、この事件において実行された犯罪的行為に対して、彼らが根本的には無罪であることを認める機能を、作者によって準備されているのである。ネルヴァルはふくろう党员に対して否定的な態度を取り続けるが、それに参加した農民たち自身を攻撃しようとする意図を持たない。彼は、農民の生活情景を描写する際には、生命力に満ちたこの地方の伝説が豊かに語られる伝統的共同体を共感を込めて描き出している。ネルヴァルはプルターニユの農民を、やはり二重に書く。彼が農民たちを攻撃するのは、反革命活動についてだけであり、彼らの受動性を通して、無垢な側面を手付かずで残すことを意図しているのである。

僧侶階級

「信者たちの信じやすさに付け込んで奪い取った富を、社会にまったく還元

することなく飲み込んでゆく巨大な淵」ネルヴァルは修道院をこのように表現している⁽²⁹⁾。不正に蓄財された盗賊たちの宝物蔵。こんな場所に警察の手が入ることになんの不思議もないであろう。革命に反対する僧侶たちに言わせれば聖域の侵犯であり、恐ろしい冒涇である教会組織の財産調査に対して、ネルヴァルは明確な支持を打ち出している⁽³⁰⁾。

ネルヴァルは国民公会の行動を、教会活動の宗教的側面と、経済、社会的側面を切り離すことによって正当化している。彼の説明によれば、フランス革命は宗教自体を攻撃する意図はいささかも持っていないのである。

とはいえ、目的には誤りが無いこの作業も、同時に、公衆の面前に曝されることなく、無垢のまま保存されるべきものをも暴きたててしまい、したがって宗教全体を傷つけてしまう可能性をネルヴァルは否定しない。革命は何か聖なるもの、貴重なもの、おそらくそれと気付くことなく宗教から奪い取ってしまったのである。

役所が宗教のヴェールを捲くり上げ、(...) 天使だけが生命の書に書きつけるべき神秘的な名前を、台帳に登録したのであった⁽³¹⁾。

神秘的な価値の否定は、すべての価値を一つの単純で共通な価値、経済価値に還元してしまう。財産目録の作成はそのような予定外の結果を引き起こすことになるのである。作者の目は歴史の全体を突き通す。もはや共和派と王党派が問題となっているのではない。一つの民族の墮落、歴史の流れを通じて悪化し続ける墮落が問題となっているのだ。ここで宗教分野において提示されるもう一つの紛争、修道院立ち退き問題を検討してみよう。先に見たように、修道院は一方で宝物蔵に類似し、またもう一方では監獄に接近する。この監獄とは自分たちの社会から追放された貴族たちの監獄である。

貴族の次男三男で軍隊の職を買えないほど貧しいものや、一族の虚栄が修道院の奥底に埋め込んだ不幸なものたちの姿がそこにみいだされるに違いない。
(...) 夫を買えないほど貧しい修道女たちもまた、解放されねばならない⁽³²⁾。

修道士と修道女はひとつの金銭ずくの世界の犠牲者であり、王政と貴族社会

を維持してゆくために必要欠くべからざる犠牲者なのである。「修道院の解散」という行為は、革命に解放者としての役割、それも貴族と僧侶という本来対立する陣営に属する人々の解放者としての役割を担うことになる。抑圧された者たちの解放と社会的平等の実現という理念は、反革命反乱時のブルターニュという時と場所の現実においては排除されるべき存在も包含して進行してゆくのである。革命側が常に宗教に対して敵対的であるわけではない。国民公会内部にも好意的な勢力は存在する。

敬虔なキリスト教徒、カトリックさえそこには存在したのだった。(…) 彼らはただ(…) 古い悪弊を一掃し、信仰と政治の自由を永遠に堅固にうち建てることができるようにしたいと考えただけだった⁽³³⁾。

もちろん唯物論者たちの勢力も確実に存在しているが、これは多数派を形成していない。従って、ネルヴァルが我々に示す革命の理念は宗教的感情と矛盾するものにはならないのである。革命精神と誠実な信仰心とが矛盾しないことは、宣誓司祭ユゲの性格付けを検討してみれば明確になるであろう。ユゲ司祭は「理神論者であるとの嫌疑を強く受けていた⁽³⁴⁾」し、彼の「プラトン、ルクレチアからルター、デカルト、フェヌロン、ルソーにいたる哲学者たちに対しても広く開かれた精神⁽³⁵⁾」は、人間の平等と地上における行動の自由を深く確信している。また、彼の信仰はオーソドックスとは言いがたく、異端の染みが点々といっていると評されながらも、この小説に登場するもう一人の司祭、骨の髄まで正当派のペシャル神父よりもずっと大きな影響力を、例えば具体的にいえばベネディクト派女子修道院長にたいして持った存在として描写される。また彼は内戦勃発以前には、地域のすべての住民から尊敬される人物であったし、その中にはジャン・ル・シューアンも含まれていた⁽³⁶⁾。実際、ユゲ神父とペシャル神父を比較すれば、前者が後者を完全に凌駕していることは明らかである。

ユゲはペシャルに対し、知力と魂にすぐれた人が、視野の狭い、性格の悪いものに抱く、冷やかな侮蔑の感情を抱いていた⁽³⁷⁾。さらに、農民たちの敵意の直中での彼の博愛主義的で孤独な戦いを通して、彼の肖像は理想的宣教者像に近づいてゆくように思われるのだ。

彼の青白い気高い面立ち、白く長い髪、その静かで落ち着いた風貌は(...) 画家たちがキリストの使徒たちに付与した、あの光輪を戴いた姿を思わせるものだった⁽³⁸⁾。これに対して、ペシャル神父の狂信的態度はキリスト教信仰を擁護するというよりは傷つけているように見える。ユゲの挙げたミサはペシャルに挑発された農民たちの「叫びと嘲りで中断されてしま」い、ユゲはついには死の脅迫を受けることになる。ここでは一人の良き説教者を殉教者に変えようとするのは革命ではなく、その天敵であるはずの反乱者のほうである。このことは、ジャンの言葉にはっきり現れている⁽³⁹⁾。聖なる場所と儀式の野蛮な暴力による冒涇の場面は、ジョルジュが重要な役割を果たす修道院接收の際の、修道女たちに対する国民衛兵隊の穏やかで寛容な態度と鮮やかな対象をなす。ジョルジュの論法は国民公会（そして作者自身の）それと共通している。革命は信仰の破壊者ではなく、信仰の自由の擁護者であり、ジョルジュは新しい市民の法と伝統的宗教の調和を具現化しているように感じられる。

* * *

以上検討してきたように、ネルヴァルが革命に対して好意的な態度を始終とり続けているのは明白である。それぞれの社会階層は内部に矛盾する要素を抱えている。貴族の類廃と、それにもかかわらずファイヨル侯爵の中に維持されている美德、農民たちの信仰心と迷信深さは表裏一体である。この二重性によって、いかなる者も完全に否定されることもなければ、肯定されることもない。とはいえ、歴史的、政治的平面においては、登場人物たちに下されるネルヴァルの価値評価には揺るぎない。貴族制度より共和制を、貴族階級よりは平民を。歴史的イベントとしての「ふくろう党」事件には完全に否定的である。しかし、個別的な歴史的イベントの価値判断を越えて歴史の流れの総体に目を向けた時、彼の態度は曖昧になる。そこで以下では、この曖昧さを検討することにしよう。

狂信と懐疑

この作品の登場人物たちに作者が与えた性格を検討すると、相反する二つの要素を軸に分類できることに気付く。我々は一方のカテゴリー「狂信的性格」、他方を「懐疑的性格」と呼ぶことにしよう。「狂信的性格」は自らの力のすべてをただ一点、唯一の目標に振り向け、別の可能性の存在を認めようとしなない。反対に「懐疑的性格」は、固定された地点から自らを解放し、物事の諸相を統合しようと努める。ユゲ神父は後者のタイプを具現する人物であろう。彼はカトリック信仰に、古典と近代の哲学を融合させている。彼は「神の摂理が不断に介入している」ことを認めず、日々の出来事は一連の偶然の集合にすぎないと考える⁽⁴⁰⁾。従って、彼がものごとに一貫した説明を与えようとする時には、諸事件を分析し、諸要素を総合することを心掛ける。彼が頼るのは直観ではなく推論である。反対にペシャル神父は地上に対する神の摂理の絶えざる介入を信じ、また自分自身の行動が常に神の意思に適うものであると信じている。従って、彼は行動に際して熟考する必要を認めない。目標に向かってまっしぐらに突進するばかりだ。まさにリトレ事典が「狂信的」の項で第一義に掲げるように「神から靈感を受けていると信じている」人物が彼である。ここでさらに、ヴォルテールの『哲学事典』から「狂信」の項を引用するのも無益ではあるまい⁽⁴¹⁾。

狂信と迷信との関係が、発熱と発作との関係に等しいヴォルテールにとって、ペシャルはまさに「狂信的」人物であろう。また彼と同様、小説中に現れるブルターニュの農民たちも狂信の人物像に含まれる。彼らは伝統的共同体に生活しているが、そこでは迷信が今も生き残り、聖職者と貴族にはひたすら盲従する。そしてすでに見たように、このような農村とその住民に、都市が対置される。ここでは都市と農村の対立は狂信と懐疑のそれを表現すると同時に、全体と部分との対立という問題を新たに派生する。農村と都市との関係は、より一般的に、中央権力と地方、統治者と被統治者の関係をも映し出している。そしてこの問題は、革命政府と反革命蜂起の対立の枠内にばかり止まるものではない。ネルヴァルは、アンシアンレジームにおける国王と地方貴族との軋轢るも言及するからである⁽⁴²⁾。中央権力が国王であろうと共和政府であろうと、ブルターニュ貴族は反抗することを躊躇わない。逆に、いったん革命が勃発すれ

ば、今度は貴族ではなく学生たちが国王政府に反旗を翻す。もはや問題になっているのは政治的信条ではなく「中央権力に対する諸地方の永遠の闘争⁽⁴³⁾」ようにも思える。しかしながら、たとえば「アンジェリック・ド・ロングヴァル」や「ピュコワ神父」が反逆する英雄であり、『東方旅行』や『オーレリア』において、打ち負かされた種族に栄光を与えたように、ネルヴァルがブルターニュの貴族たちに「反逆たちへの深い共感⁽⁴⁴⁾」を覚えていたと考えるは難しい。この小説に登場する貴族のほとんどは、すでに見たように、その土地の守護者というよりは、自己の利益の確保に汲々とするものでしかなく、かつて「墮落した文明に新たな命を与えた」「戦闘的な種族」⁽⁴⁵⁾の面影は既に無い。彼らを、神に抗して大地の活力の源である「火の聖地」を守る一族⁽⁴⁶⁾の系譜に連なる者として作者が描いていないのは明らかであろう。この点で、アンジェリックとファイヨル伯の娘カプリエルを比較するのは興味深い。二人とも由緒正しい貴族の子女であり、自分の選んだ恋の相手を、身分違いという理由によって父親に禁止されるという状況に直面する点で良く似た登場人物である。しかし、その後彼女らが取った態度は正反対である。アンジェリックは父親の反対に屈せず、平民への愛を貫き通す。そのため彼女は惨めな状態に陥ることになるが、一つの物語のヒロイン、ネルヴァルの反逆者の一人として、その系譜の中に席を与えられる。それに対してガプリエルは父親の言葉に易々と応じ、その権威に従ってジョルジュとの関係を絶ってしまう。彼女はその後、物語から姿を消し、対立する二つの社会、あるいは主人公たちを結びつける契機とはなりえない。彼女は「火の娘」とは成りえない。

ところで、一方で、このアンジェリックとガプリエルとの対立は、「情熱」と「理性」との対立、狂信と懐疑とのその一つの変奏ともなっている。ガプリエルの場合、勝利を収めるのは理性である。彼女は理性の働きに応じて、自分の恋を放棄する⁽⁴⁷⁾。それに対し、常に情熱が優位を保つのが、臬党蜂起の中心人物ラ・ルエリ侯爵とベシヤール神父の場合である。ベシヤールの説教は、論理に訴えるよりも、比喩を多用し聴衆の感情をかきたてることを目的とする。例えば

兄弟たちよ！、と彼は荒々しく情熱に満ちた声で叫んだ。子羊の衣を纏って
お前たちのもとにやって来る、あの狼たちを信用してはならない⁽⁴⁸⁾。

ユゲ神父の説教は対照的である。

お互いを慈しみ合うのだ！ (...) 狂信は嘲り、呪い、兄弟に武器を向けさせようと努めるものだ⁽⁴⁹⁾。

この場面で、理性的な言葉で自分の考えを理解させようとするユゲの説教は、ミサに集まる農民たちを納得させることができない。勝利を収めるのはベシヤールの煽動的な演説である。彼と同様、ラ・ルエリ侯爵も、人々を蜂起させるために、感情に訴える言葉を用いる。ネルヴァルはここでも「情熱」と「狂信」を同時に使っている。

あらゆる情熱、あらゆる憎悪がひとつの窟に集まり、燃え上がった。 (...) ラ・ルエリの黒い瞳は稲妻を放ち、この瞬間の彼は、瞳目すべき狂信と情熱の人であった⁽⁵⁰⁾。

まるで語り手自身が彼に魅了されているような文章である。このラ・ルエリの姿こそ、反省によってその効果が減少してしまうことのない、純粋な情熱の力を表している。彼は「狂信」の権化とも言えよう。何事かを成そうとする時に、彼は露ほどのためらいも見せない。彼は何者も揺るがすことのできない確信にしたがって行動している。彼はその意思において完全に自由であり、『東方旅行』でネルヴァルが語る「地下の種族」に、彼こそが属しているかのようなのである。しかし、先に述べたように反革命運動の正当性が作者に否定されてしまっている以上、『東方旅行』において地下の神々が天上の唯一神に対抗してもったような世界観を、彼が持っているとは考えにくい。というよりはむしろ、彼はそのような原理を必要としていないようにも思われる。例えばベシヤールにはこれがある。ベシヤールは自分の行動を正当化し、自分を支えるものとして神の摂理を必要とする。彼に世界の在るべき姿を示し、進むべき道を指し示すのは、彼が理解していると考えられる神の摂理である。一方ラ・ルエリは自分の行動を歴史的、社会的に一貫したものとして説明してくれる原理には無頓着だ。今日王政の守護者として革命に抵抗している彼は、かつて自身の特権を守るた

めに国王に反抗したであろうし、かつてアメリカで共和国防衛のために戦ったかれが、今日王政を奉じて革命政府を攻撃している。また彼は内戦がもたらす国土の疲弊にも、彼の手足となって働き、死んでゆく農民たちにも冷淡である。彼は彼自身のためにのみ戦い、彼の行動と外側の世界との関係にはほとんど注意を払わない。彼にとって世界は自分の内面を投影する場であり、獲得すべき欲望の対象でしかない。彼は一種の絶対的な自由を獲得したともいえるだろうが、それはあたかも人が夢の中で得るような自由である。世界に合わせて自分を形づくるのではなく、自分の欲望が叶うように世界を変えようと試みるという点で、言い換えれば夢想と人生を一つしようとする点で、ラ・ルエリ侯爵の中にはネルヴァルの理想の一つが具現しているとも考えることも可能であろう。ただし、ネルヴァルが一方で、「現実世界への夢の侵入⁶¹⁾」に伴う危険にも意識的であったことを忘れてはなるまい。狂信的なるものはネルヴァルを引きつける、と同時に、それと釣り合いをとるものとしての懐疑主義も彼には必要なのである。この二重性を体現するのがファイヨル侯爵と、彼の息子ジョルジュである。最初ファイヨル侯爵はラ・ルエリに類似した、行動の人として描かれる。特に若い頃の彼の行為は、色恋沙汰や決闘騒ぎ、アメリカ独立戦争への参加など、ラ・ルエリの行動と共通している。ところが反革命蜂起に参加する内に、しだいに彼は懐疑的になってゆき、ついには自らの行動の正当性の確信を失うに到る。彼の心に「生きることへの深い嫌悪⁶²⁾」を引き起こすのは、友人たる貴族たちの参加動機に対する疑いであり、また彼自身の行動の矛盾である。彼は貴族階級の墮落から目を逸らすことができない。ラ・ルエリと違い、彼は自分の行動が世界全体、歴史にたいして価値を持つと考えられなければ行動することができない。自分が無益なことをしていると感じた時、彼は闘争を放棄し、アメリカに戻って生活することを夢見はじめる。アメリカは未だ墮落の兆候さえみせていない若々しい人々が住む理想の大地である。理想と現実とを調和させる方法を見出せない彼は、アメリカ大陸という桃源郷に逃避することを考えるのである。

父と同様、ジョルジュも二つの世界に引き裂かれている。子供の頃の彼にとっては貴族社会が一つの夢想の世界だった。自分が実は由緒正しい家柄の生まれなのだと考えて心を慰めたりしたものだった。大公殿下か、少なくともどこかの公爵の御落胤なんだと考えるのは、なんと甘美な夢想だったことか、もち

ろんこの子供っぽい夢には何の現実性もないわけだが、ガブリエルへの愛はこの夢に一つの実現可能性を与える。ところがその瞬間かれは城から放逐され、彼の夢は完全に崩壊する。彼を城から引き離す、言い換えれば夢想から現実に戻す（ジョルジュが実は侯爵の実子であったことはここでは問題ではない）役割を果たすのがユゲ神父であったことは、やはり注目する必要があるだろう。ベジャールとの対比においても彼が「理性」側を代表していたことはすでに述べたが、幼年時代の夢と現実が渾然一体となった世界から、世界を理性的に眺めることを教え、子供が大人に成るのを促す父親の役割をユゲは果たしているのである。また彼が田園から都市に移動していることも付け加えておこう。さて、ユゲの薫陶を受けて長ずるに及び、ジョルジュはもはや幼年時代の夢想が夢想に過ぎないこと、現実と夢を区別する術を、懐疑の精神を知るようになるが、その一方で彼はガブリエルへの愛を断念することができないでいる。

ジョルジュは矛盾する心の動きを抑えることができないでいた。（…）彼はこの成就することのない愛を完全に心の内から締め出そうと決心していたのであったが、いくつかの魔法の言葉が幼年時代のあれこれの思い出を突然呼び起こすと、感情が溢れだし、心が騒いでしかたなくなるのであった⁽⁶³⁾。

小説はここで未完のまま中断する。ジョルジュがガブリエルの誘惑に乗ってしまうのか、あるいは『シルヴィ』の主人公の「経験の果実⁽⁶⁴⁾」を味わうことになるのか我々はわからないが、ジョルジュが狂信と懐疑の間で揺れ動いていることは間違いない。ひとつ付け加えれば、ジョルジュのガブリエルへの愛は常に彼の愛読書である『新エロイーズ』と結びついている。想像世界と現実世界の融合は、これもまた一種の狂信であり、狂気を孕むものである。

夢と現実の狭間でさまようこの二人と対象的に、そしてラ・ルエリとベジャールとは正反対の立場から、ユゲ神父は断固として行動する人物である。彼は自由意思の存在を信じ、人間理性を信頼している。注意深く物事を検討するが、最善と考える方法を選択し、一度決心してしまえば彼は惑うことがない。彼は一つの理想を実現しようとしているが、この理想は現実の彼方にある夢ではなく、地上で実現可能なものである。彼にとって理想と現実のあいだに越えがたい溝はない。彼はいわば理想主義的かつ活動的な懐疑主義者である。狂信者と

は反対に、彼は闘争に対しては平和を、分割に対して統合を、断絶に対して継続を説く。ところで、ユゲはこの小説の中で理想的に描かれる人物であるが、彼もまた一つの袋小路に追い詰められる。彼の教会での崇高な雄弁も効果を表さず、田園に平和をもたらすには程遠い。理想と現実はこちらで再び、ただし今度は人物の内側ではなく外側で分裂する。懐疑主義を代表するもうひとりの人物として、ファイヨル伯爵を挙げることができる。彼はいわば懐疑主義の負の側面を示し、ユゲの対極に立つ人物である。彼の思想と行動はまったく一貫性を持たない。状況に応じ、その時々で最大の利益を上げようというのが彼の行動方針である。彼は現在にのみ生き、彼の視界のそとに在るものは、彼にとって存在しない。彼は何も信じず、まったく外部に働き掛けない。理想と現実との混同は狂気に接近するが、理想の完全な欠如もまたネルヴァルにとっては受け入れがたいものなのだ。

今日では懐疑的かつ冷笑的なヴォルテールの精神がブルターニュの農民にまで浸透している。革命以前に所有していた膨大な財産を失った聖職者たちは、彼らが地方に持っていた影響力の多くの部分を失ってしまった。彼らは今では給料を支給される公務員に分類されるのである。聖職はもはやほとんどひとつの職業でしかない(...)。⁶⁵⁾

ブルターニュの農民のかつてと現在の姿の違いと、それを描くネルヴァルの筆致は、夢と現実との間で揺れる彼自身の葛藤を映しているかのかのようである。

* * *

この小説のなかで、いささか類型的ではある登場人物たちの行動を通じて、ネルヴァルは理想と現実の葛藤を描いた。解決しがたい矛盾に直面した人物たちは、それぞれの方法で対応しようとする。あるものは現実を拒否し、あるいはそこから目を逸らし、またあるものは理想を放棄する。その両立を目指して奮闘するものもいる。ネルヴァルの関心がこの最後のカテゴリーに属す

る人々であるのは明白であるが、登場人物たちはすべて袋小路に陥り、作者自身その解決策をみいだせないでいるようである。小説は未完のまま現在にいたっている。

注

使用した略号

NPLI :Gérard de Nerval,*Oeuvres Complète*, éd. publié sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois, Gallimard. (Bibliothèque de la Pléiade),t.I,1989.

NPLII :*Ibid.*,t.II,1984

NPLIII :*Ibid.*,t.III,1993

1. Paul Bénichou, *Le Sacre de l'écrivain*, Jose Corti, 1985, p.450

2. *ibid.*

3. cf Susan Dann, *Nerval et le roman historique*, Minard, "Archives nervaliennes" no 12,1981, pp.58-70

4. *NPL I*, pp.306-307

5. *NPL I*, pp.309-313

6. *NPL I*, pp.342-347. Sur l'interprétation de ces articles, voir Monique Streiff-Moretti, "Gérard de Nerval écrivain politique. Les articles du Carrousel ", in *R.H.L.F.*, septembre-octobre 1976.

7. *NPL I*, p.1200. Sur la documentation de Nerval, voir Notice de Jacques Bony, *NPL I*, pp.1893-1903, et,Susan Dann, *op.cit.*, pp.39-53

8. *NPL I*, p.1143.

9. *NPL I*, p.1173.

10. *NPL I*, p.1248.

11. *ibid.*

12. *NPL I*, p.1259

13. *NPL I*, p.1144

14. *NPL I*, p.1244
 15. *NPL I*, p.1155
 16. *NPL I*, p.1244
 17. *NPL I*, p.1156
 18. *NPL I*, pp.1166-1167
 19. *NPL I*, p.1159
 20. *NPL I*, p.1204
 21. *ibid.*
- Jacques Bony, *op.cit.*, p.51
22. *NPL I*, p.1163
 23. *NPL I*, p.1188
 24. *NPL I*, pp.1166-1167
 25. Jacques Bony, *op.cit.*, p.51
 26. *NPL I*, p.1189
 27. *NPL I*, p.1233
 28. *NPL I*, p.1247
 29. *NPL I*, p.1234
 30. *ibid.*
 31. *ibid.*
 32. *ibid.*
 33. *NPL I*, p.1235
 34. *NPL I*, p.1143
 35. *NPL I*, p.1144
 36. *NPL I*, p.1230
 37. *NPL I*, p.1179
 38. *NPL I*, p.1229
 39. *NPL I*, pp.1230-1231
 40. voir *NPL I*, p.1151-1152
 41. Voltaire, *Dictionnaire philosophique*, éd. Garnier-Flammarion, 1964, p.189.
 42. *NPL I*, p.1134
 43. Jacques Bony, *op.cit.*, p.50
 44. *ibid.*
 45. *NPL I*, p.1155

46. voir *Voyage en Orient*, *NPL I*, p.720. Sur le probleme des descentes aux Enfers et cette dualite chez Nerval, voir Ross Chambers, *Gérard de Nerval et la Poétique du Voyage*, Jose Corti, 1969, pp.138-148

47. *NPL I*, p.1172

48. *NPL I*, p.1229

49. *ibid.*

50. *NPL I*, p.1205

51. *NPL III*, p.699

52. *NPL I*, p.1244

53 *NPL I*, pp.1256-1257

54. *NPL III*, p.567

55. *NPL I*, pp.1192-1193